マレーシア・ジョホールバルにおける MM2H ビザ取得件数増加の要因と生活インフラ事情

黒田　明雄
倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

（2012 年 10 月 1 日　受理）

1　はじめに

マレーシア政府観光省[1]が公表した資料によると、日本人の MM2H ビザ取得件数[2]は 2010 年までは毎年 200 件程度を推移していたが、2011 年は 423 件で中国などの他国を抜いてトップになった。取得件数が倍増したのである。2012 年では 6 月末の時点で既に 400 件を超えている。取得件数急増の背景には大震災や不動産への投資があると考えられる。

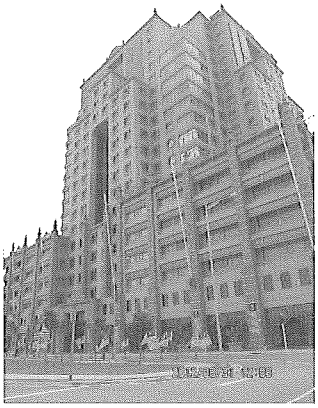

写真 1　マレーシア政府観光省

在マレーシア日本大使館によると、2009 年 10 月 1 日時点（届出統計日）で MM2H ビザ滞在者（通称セカンドホーマー）はマレーシア全体で 701 人が在留届を提出しているという[3]。ジョホールバル出張駐在官事務所への MM2H ビザ滞在の届け出人数はジョホール州でわずか 9 人であった。ビザを取得し滞在する人であっても義務付けられた在留届を提出しない場合もある。

2012 年 8 月の調査滞在期間中に、ジョホールバル（以下、JB と略）の日系 G 社 1 社だけで 2011 年 1 月から 70 件を超える取得件数（申請中含）を出している情報を得た。これまで JB は日系企業の駐在員及びその家族が大勢を占めていた。この状況からすると JB だけでも 2012 年の MM2H 取得件数は優に 100 件を超えると推察される。マレーシア政府観光省は、日本人の MM2H ビザ取得を歓迎するとともにその動向に注目している。

筆者は日本人がロングステイ先に選ぶマレーシア各地域（首都クアラルンプール、ペナン、イポー、キャメロンハイランド、コタキナバル）の調査を継続的に実施している。また、ロングステイ財団の登録講師 & 登録アドバイザー[4]として、ロングステイフェアーやセミナーなどの機会に相談活動をおこなってきた。最近では、相談内容が投資や親子留学の場合も少しずつ増えてきた。

JB については、マレーシアの中でロングステイの有力な候補地として取り上げられたことがなく、現地のインフラ状況を把握できていない地域の一つであった。

本稿の目的は、JB における MM2H ビザ取得増加の要因、MM2H ビザ滞在者の視点か

らみた総合的な生活インフラ[5]の現状と課題を把握し、後に続くMM2Hビザ滞在者のための環境整備や相談活動に還元することである。調査滞在期間中[6]に、行政機関である在マレーシア日本大使館のJB出張駐在官事務所、日本人会、JB観光局・情報センター、私立総合病院、日系不動産会社、公共交通機関、日系スーパーなど関係機関を訪問した。また、実際にMM2Hビザ滞在者の住居を訪問した。現地調査にあたっては、携帯電話でアポイントを取り、地図を片手に自分の足で歩くことに努め、公共交通機関のバスを中心に状況に応じてタクシーを利用し、現地の生活感覚を大切にした。（2012年8月9月調査時点1RM ≒ 25円 マレーシア通貨RMリンギット）

2　ジョホールバルの地理的位置

マレーシアはマレー半島（西マレーシア）に11州、ボルネオ島（東マレーシア）に2州の計13州から成る国である。JBはマレー半島最南端に位置するジョホール州の州都であり、マレーシア第2の都市である。約1kmのジョホール海峡を橋で結ぶ道路（コーズウェイ）を渡れば、隣国シンガポールである。JBは経済水準において先進国の仲間入りを果たしたシンガポールに隣接する国境の街である。北緯1度の赤道直下に位置し、常夏で熱帯性高温多湿の気候である。

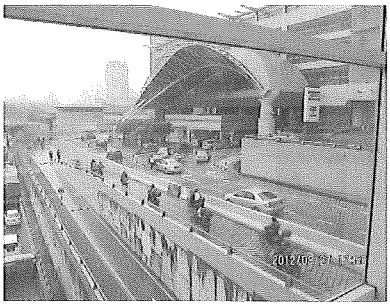

写真2　JBイミグレーション

JBへは、日本からクアラルンプール（KL）・KLIA空港を経由してJBスナイ空港に入る経路とシンガポール・チャンギ空港から車やバスでJBに入る経路がある。現在はLCCのエアアジアXやジェットスター・アジアが運行するようになり、時間に制約のないMM2Hビザ滞在者には手ごろな価格で日馬（日本・マレーシア）間の往復ができるようになった。

日系企業や在留邦人にとって、JBの最大のメリットはシンガポールに近く、コーズウェイを渡れば、シンガポールのインフラが利用できるということである。車で1時間も走れば日系病院や日系スーパー、日本料理店、日本書籍など総合的なインフラが整っているシンガポールの中心部オーチャードにたどり着く。

週末の夕方になると、JBのイミグレーション（イミグレ出入国審査機関）にシンガポールナンバーの自家用車が大行列をつくる風物詩が見られる。彼らは物価の安いマレーシアに入り、旅行や食事、買い物のあと、帰りにガソリンを満タンにして出国審査を待っている。

朝夕は、同じJBのイミグレにマレーシア人の通勤車両やバイクの流れが見られる。給料のよいシンガポールに働きに行く流れは昔も今も変わらない。

3　JBのMM2Hビザ取得者数と住居

1）マレーシア全体のMM2Hビザ取得状況

LS財団の調査統計[7]によると、近年、日本人のロングステイ希望上位国のトップに選ばれるのがマレーシアである。この状況は2006年から続いている。

前述したように、マレーシア政府観光省MM2Hセンターの統計によれば日本人の年間ビザ取得件数は以下の通りである。震災前の2006年から2010年までは、毎年約200件前後を推移していた。震災が起こった2011年は423件で、中国などの取得上位国を抜いて第1位となった。ビザ代行業者[8]によると2012年の夏時点で既に400件を超えており、2012年の全取得件数は倍増する勢いである。

これまではシニア世代が第二の人生を一定期間過ごす場としてマレーシアが選択される傾向にあった。震災以降は、MM2Hビザの取得目的や取得年齢層に広がりがみられる。MM2Hビザを取得しても、投資物件を購入したり資産分散のために口座を開設したりするだけで、実際に滞在しないMM2Hビザ取得スタイルも見られる。また、比較的短期間でビザを返納して帰国する人もいる。マレーシア政府観光省MM2Hセンターの統計では、年次別のMM2Hビザ取得件数は公開されているが、取得目的、滞在者数、返納件数は公開されていない。MM2Hビザ取得の実態分析は今後の課題である。

2）JBのMM2Hビザ取得状況

2012年のMM2Hセンターのデータはまだ公表されていないが、前述したように2011年1月からJBの日系G社[9]1社がかかわったMM2Hビザ取得件数（申請中含）は70件を優に超えている。同社の藤村CEOによれば、既に70人の移住者を出し、不動産を購入した350人も移住予備軍と見込んでいる。他の会社の取り扱いを含めるとマレーシア全体の取得件数の中で、JBは一定の割合を占めることになる。

これまでJBはMM2Hビザを取得した年金生活者のロングステイの有力な候補地としてセミナーで話題にならなかった。しかし、ここ1、2年の間にJBでは幅広い年代層のMM2Hビザ取得者が急増している。その背景には、投資や資産分散、震災による不安、親子留学にからんでMM2Hビザを取得する人がいる状況を確認した。マレーシアは経済成長していて、各社の投資セミナーやマスコミの情報に触れる機会もある。G社は経済的な背景がある日本人を対象に建設前のコンドミニアム（以下、コンドと略）内の住居（ユニット）を予約販売していた。購入者の年齢層は20代から60代と幅広い。筆者は20代、40代、60代の方の住居（ユニット）を訪問して、移住の経緯や生活スタイルなどについてインタビューを実施した。それぞれ移住目的は異なるものの、ユニット購入が投資であるという考え方がベースにあり、完成した部屋に自分が入居するかどうかはその後の状況次第である。MM2Hビザ取得に合わせてHSBC銀行にプレミア口座[10]を開設し有利な条件で融資が得やすいことも、投資を後押しする要因であろう。複数の投資物件を購入する人もいる。

MM2H ビザを取得しなくても物件の購入は可能である。日本に居ながら、コンドの完成後は管理会社に賃貸や売買に関して管理を委ねることができる。MM2H ビザを取得しても、必ずしもマレーシアに住む必要はないので投資目的の購入者もいる。

少数ではあるが、JB に国際的な教育の場を求めて親子留学（母子、家族）で滞在を選択した人もいる。親子留学の学校の選択肢は日本人学校と国際校の 2 通りある。アイデンティティや母国語の習得など重要な人間形成の問題があるので慎重な判断が必要である。

日本人学校への編入は、駐在員の子弟、MM2H ビザ取得者の子弟と条件がある。ごく一部に MM2H ビザを取得し、日本人学校を選択する人がいた。ビザ取得には 50 万 RM 以上の高額な資産証明と現地銀行への 30 万 RM 以上（50 歳以下の場合）の口座預金、さらに授業料、通学バス代などの支払いが求められる。生活のための賃貸ユニットの支払いもある。経済的な裏付けのある人でないとこのような選択は困難である。MM2H ビザ取得見込みで日本人学校に編入したが、申請が通らず国際校へ転校するケースもみられた。一定の資産のある年金生活の祖父母が移住し、日本にいる父母が資金援助するような形であれば問題はない。

国際校[11]は JB にもいくつかあり、学生ビザを取得して英語を授業用語とする学校に通わせるケースがある。学生ビザ取得には、MM2H ビザ取得にかかる高額な資金証明や口座預金は必要ない。しかし、駐在員でない人の親子での長期滞在となると、授業料、ユニットの賃貸料、子供の送迎費用、生活費など思いのほか経費が必要となる。調査滞在期間中に親子留学で来馬した母親と男子小学生に会い事情を聞いた。これも経済的な裏付けのある人の選択の一つである。韓国人の留学は珍しい話題ではない。複数の韓国人学生がルームシェアーし、母親が交代でやってきて世話をするケースがあった。

3）イスカンダル計画とリトル・ジャパン構想

資料「The World in one City」[12]の中にマレーシア経済の発展効果を目途に壮大なイスカンダル計画が記されている。期間は 2006 年～ 2025 年、2018 年にはシンガポールの MRT を JB に延長、2020 年に所得倍増、2025 年に人口・GDP・雇用の倍増など、隣国シンガポールのインフラを活用し大規模な都市計画の完成を目指している。JB 一帯に金融、商業、教育、高級住宅などの施設を誘致する巨大なプロジェクトである。

日系 G 社は、JB のタマン・モレック地区に 2015 年完成を目指した新たなコンド 2 棟のユニットの半数約 200 物件を日本人富裕層向けに販売している。外国人の購入できる物件は 50 万 RM 以上である。日本人への販売価格は 1 ユニット 3 ベッドルーム（R）が基本で 2000 万円前後からある。日本人が快適に生活できる町づくりを目指し、総合的にインフラを整備する壮大な計画である。日系病院の準備も進んでいた。これは先のイスカンダル計画と連動したリトル・ジャパン[13]構想である。

ユニット購入者の MM2H ビザ取得には投資がベースにある。将来、当地でビジネスを展開する予定の人もいる。完成後の値上がり転売や賃貸を考えている人もいる。現在、ユ

ニットを予約購入し、別の賃貸ユニットに居住しているMM2Hビザ滞在者もいる。その20代から60代の人にもインタビューを実施した。

G社のリトル・ジャパン構想の推進には莫大な資金が必要である。現在、マレーシア経済はバブル期にあると言われている。1980年代半ばにスペインを舞台に移住モデルの提案が通産省からシルバー・コロンビア計画[14]として発表されたが、内外の批判を受け計画は頓挫した。時を経てユーロ圏に加入したスペインはバブル期から崩壊に至り、日本人のロングステイヤーは経済危機の影響を受けて多くは帰国したという経緯がある。

JBでのユニット購入は、リスクを伴うものであり資金に余裕のある人の投資行動である。年金生活のMM2Hビザ滞在者の大半は、状況を冷静にみている。少し前まで外国人が購入できる物件は25万RMからであった。現在、50万RMとなり、ペナン州では100万RMと最低購入価格は上昇している。イスカンダル計画により経済水準が上がり、シンガポールのように外国企業の駐在員とその家族が集まるような都市になることが投資成功の鍵になるだろう。

4）賃貸ユニット

在留邦人の大半は、セキュリティのある安全性の高いコンドのユニットに住んでいる。JBの場合、日本人駐在員はSutlang View、Straits View、Molek Pine Luxury、Retrieなどに集中している。仲介業者による新たなMM2Hビザ滞在者もこれらのコンドのユニットに住む人が多い。インタビューに応じてくれた人の賃貸料は中層ユニット3ベッドRで3000RM位であった。生活費全体に占める賃貸料の割合は大きい。経済的に問題のない人であれば出せる月額であるが、為替の変動を考慮すると年金頼みの人には少々高い賃貸料である。マレーシアでの一般的なMM2H滞在者の1ヶ月あたりの支出は、賃貸料を含めて約12～20万円[15]である。現地では3ベッドRが基本であり、夫婦または単身で住む場合には広すぎるほどである。高層になるほど眺望や風通しよく賃貸料も高い。

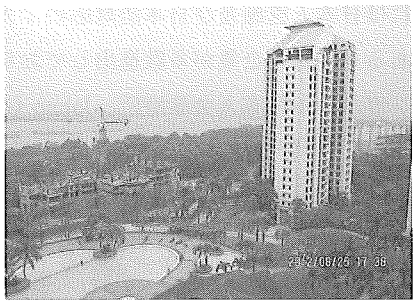

写真3　高級コンドミニアム

このようなセキュリティ付のコンドのユニットに住む外国人は裕福にみられている。タクシー運転手の月額収入は2000RM前後である。高級コンドに住み、自家用車を所有する外国人は日本人に限らず目立つ存在である。しかし、現地事情に精通したMM2Hビザ滞在者の中には、月1500RM程度で賃貸ユニットに入居しているケースもあった。

4　病院・保険医療情報

1）日本人がよく利用するJBの病院

JBセントラル駅からタクシーで10分の距離にKPJ JOHOR SPECIALIST HOSPITAL

がある。JB では信頼度の高い英語対応の私立総合病院である。日本人も小児科・産婦人科などを利用している。その他、日本人学校が利用する私立総合病院 REGENCY SPECIALIST HOSPITAL がある。日本留学経験があり日本語で対応できる Siow 医師のいる JB SPECIALIST HOSPITAL は小児科・婦人科を有し、日本人学校の校医となっている。現在、JB には日本人医師が勤務する病院はないが、リトル・ジャパン構想が実現すれば日系病院が開業する見込みである。

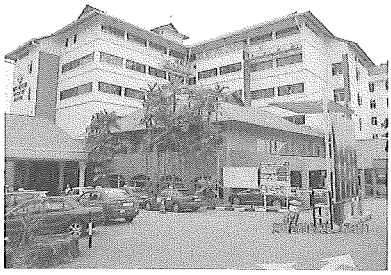

写真４　KPJ 私立総合病院

マレーシアの私立総合病院は日本の総合病院と同様に各科を有しているが、病院内の一室を借りた個人開業医が集合したオープンシステムの病院であることが多い。現地では患者が医師を選ぶ考え方が普通であり、日本人社会の評判が選択の目安の一つとなる。

２）シンガポールの日本語対応病院

日本語での対応により安心感を求める人には、JB から約１時間のシンガポール中心部には日本人医師及び日本語対応のできる医師が勤務する病院がある。小さな都市国家であるが、日系企業が多数進出しており、日系病院の数も他のアジア地域に比べ多い。シンガポール日本人会診療所、Japan Green Clinic、Japan Medical care、Nihon Premium Clinic、杉野ファミリークリニック、Raffles Japanese Clinic（歯科含）、A City Nihon Dental Centre など選択肢は広い。医師との意思疎通や治療説明の際のメリットはある。また、日系クリニックで対応がむずかしい場合は、専門医の紹介や入院の手配も受けられる。病院情報については『ハローシンガポール（生活・ビジネス情報ガイド）』[16] が参考になる。

３）日本とマレーシアの医療保険の違い

日本の保険は非常に優れていることを再認識させられる。

国民健康保険は持病や歯科治療の費用もカバーするが、海外旅行保険（カード付帯保険含）は、死亡保障、事故や病気による治療、破損保障、支援費用までカバーしているものの、持病や既往症、歯科治療は対象外である。

住民票を日本に置いたままにしている場合は、海外でも国民健康保険の適用を受けることができる。ただし、立て替え払いの必要があるので、帰国後に請求する用紙を持参しておくことが必要である。

健康に不安がなく、住民票を抜いた人の場合、海外旅行保険（カード付帯保険含）で備えているケースや入院や手術に備え日本の民間会社の医療保険に加入している人もいる。

マレーシアには、日本の国民健康保険のような通院をカバーする制度はない。政府系の病院は安価だが、私立病院のような早い対応は望めない。日本では、保険加入証を提示し、治療後に支払いをするのが一般的である。しかし、海外では病院に行くと先に治療費の支

払い確認を求められる。マレーシアにおいても、最初に保険証書やクレジットカードまたは手持ちの現金の提示を求められる。高額な手術の場合、デポジット（手付金）を最初に支払わないといけないケースもある。日本のように後払いは効かない。キャッシュレス対応の日本の海外旅行保険に加入している場合は支払いのわずらわしさが軽減する。

マレーシアの医療保険は、前述のように基本的に手術や入院をカバーするものである。かぜ、腹痛、発熱、けがなど一般的な軽い通院での治療は対象外である。現地にも三井住友マレーシアや東京海上マレーシアなどの日系保険会社があるが、マレーシアの医療保険に準じた保険商品である。持病や既往症、歯に不安のある人で、この点をよく理解せず、住民票を抜いてきた場合、困ることが起きる可能性がある。脳や心臓などの病気での緊急事態の場合は、日本人通訳のいる私立総合病院へかかることを勧めるが、現在のところJBには日本人通訳のいる病院はない。隣国シンガポールへ救急車による搬送となると高額な費用が発生する。救急車は海外では日本のように無料ではない。

医師との信頼関係や意思疎通を重視する場合、症状が落ち着いて日本に帰国して治療することも選択肢の一つである。住民票を抜いている場合は、日本への帰国の際に地元市役所で住民票の再登録をすれば、国民健康保険の適用を受けることができる。国民健康保険の保険料の請求は数ヶ月後に送られてくる。小額の治療費であれば、国民健康保険の適用を受けないで全額自己負担をする選択もある。手術や入院を伴う高額な出費には、国民健康保険は非常にありがたい。

住民票を抜いてきているMM2Hビザ滞在者から、アドバイザーの筆者に保険のアドバイスを求められることが多々あった。国民健康保険が海外で適用できることや海外旅行保険（カード付帯保険含）は広範囲なカバーをしていること、日本の保険制度や民間保険の優れた点のみならず、実際の備えについて何人もの人に説明をした。

4）緊急時の備え

現在、JBにはマレーシア各地のような60代70代のシニア世代のMM2Hビザ滞在者は少ない。しかし、会社という後ろ盾のないMM2Hビザ滞在者は、自力で健康安全管理をしなければならない。インタビューから判断して、家族や夫婦、単身者にかかわらず、JBの病院の状況や保険への理解や緊急時への備えが十分とは思えなかった。JBの滞在期間の比較的短い人の中には、シンガポールに行けば日系病院があるからという考えを共有していた。

JBには前述のように日本人通訳のいる私立総合病院はない。重篤な病気の場合はシンガポールへの搬送をしなければならない場合もある。実際に搬送事例もあることをJB駐在官事務所で確認した。海外であることを念頭に置いて、日ごろから夫婦間や知人友人間などで緊急時を想定したシミュレーションをしておきたい。いざというときの準備を一覧表にしたり、緊急グッズをまとめたりしておくことが必要である。病院関係者とのやりとりから、下記のような準備が最低限必要であると考える。

・複数の私立総合病院の救急車の連絡先と住所
・支援可能な通訳の緊急連絡先（日本人通訳、サポート業者、知人・友人）
・氏名、年齢、性別、支援者名、患者との関係、症状、居場所、住所、コンド名、ユニット番号
・携帯電話番号（支援者、患者）
・英文での病名伝達
・パスポート（患者、支援者）
・加入医療保険の連絡先（海外旅行保険、カード付帯保険、現地の保険）
・海外旅行保険証書またはカード付帯保険（記入用紙）
・国民健康保険（事後処理のための診療内容証明書、領収明細書）
・クレジットカード（現金）
・英文個人情報（血液型、服用薬、手術歴、住所、連絡先など）
・入院セット（洗面用具、衣類など）
・自家用車で搬送の場合の経路と手順

5　交通事情

1）車優先社会

マレーシアは車優先社会である。第二の都市JBにおいても人が歩道を移動しやすいような道路のつくりになっていない。道路を横切るのに神経を使う。歩道には凹凸や破損箇所が目立ち、高齢者や障害者にとって歩きにくい。横断歩道は少なく、現地の人は通行車両の隙間をぬって渡っている。車両の正面衝突を回避するように一方通行になっているところが多く、タクシーで目的地にたどり着くのに大回りをすることがよくある。マレーシアの所得水準はまだまだ高くないが、JBでは自家用車の所有者が増加し、バイクの数は減少傾向にある。自転車を利用している人はほとんど見かけない。

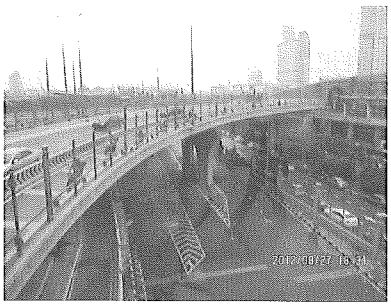

写真５　JB駅付近の道路

自家用車所有の有無は生活スタイルを大きく左右する。現地で一定期間を過ごすと交通事情に慣れてくるが、それでも運転がストレスになる人もいる。自家用車がなくても生活ができるが、日本で生活をしていた人には、車は携帯電話、ノートパソコンとならぶ生活必需品の一つといえる。

2）公共交通機関

JBには、マレー鉄道のJBセントラル駅、北部へ向かうラーキン・バスターミナル、シンガポールに向かうコタラヤ・バスターミナルがある。路線バスは約30分乗車して2RM

程度の安価な料金で、JBセントラル駅を中心に各方面へ出ている。JBからKLまで高速バスに4時間乗って約30RMだった。市内を走るタクシーは初乗り3RMで、流しのタクシーが多く、利用しやすい。呼び出しは2RMの追加料金がかかる。市内のタクシー移動は10RM～20RM程度の料金である。現地の所得水準に合わせた料金であるので、日本人の感覚からすると安く感じる。バスを乗りこなすには多少の語学力と慣れが必要である。

日常的に出かける頻度の高い所は、品ぞろえの整った日系スーパー・イオンである。交通の便に恵まれた都合のよいコンドはない。在留邦人の多くはほとんど路線バスを利用せず、住居の立地条件や安全から自家用車やタクシーを利用している。

3）自家用車と現地の保険

MM2Hビザ取得者には日本からの中古車（自身名義で6ヶ月以上使用した車）を1台無税で輸入できる。また、マレーシア国内の現地生産車を無税で購入できる特典がある。輸入車の運転を始めた人から、アドバイザーの筆者に運転心得をたずねられることがあった。

車を所有し運転をする場合は、マレーシアの自動車保険制度と緊急時の対応方法について基本的な理解が必要である。

自動車保険の基本加入の対象は、対人賠償、対物賠償、車両損害の3項目で日本の無事故割引が適用される。これらの保険でカバーされないものもあり、各種の特約が設けられている。搭乗者傷害、窓ガラスや付属品、弁護士費用などは特約となる。車内を離れるときに、ナビを外すか隠すかし、貴重品を置かないことが原則である。ハンドルロックを装着して用心している人もいる。

日系保険会社は、国際的な医療保険や傷害保険商品を出している。保障範囲や保障金額、加入年齢（65歳以下）に注意を要する。

6　食材・生活物資の購入と物価

1）日系スーパー・イオンとPマート

イオン（ジャスコ）3店舗を確認した。地元ではジャスコの名前で知られている。そのうちの一番大きいテブラオ・イオンに、JB駅からバスに約30分乗って行ってみた。料金

写真6　イオン

写真7　日本食材コーナー

は2.4RMだった。必要な生活物資、日本の食材はほぼ購入可能である。日本食材コーナーがあり、価格は少し高めである。パック詰めの握り寿司やばら売りの握り寿司も選ぶのに迷うくらいの品ぞろえであった。JBからインドに出張する駐在員が、土産に日本のお茶漬けやレトルト食品をまとめ買いしていた。JBにはKLやシンガポールのように日本の書籍コーナーを有する書店はないが、ネット利用により情報入手の不自由さを感じることはない。

日本食材の専門店として、日本人が多く住むストラング・ビュー・コンド付近にコンビニ規模のPマートがある。調味料、冷凍食品、お菓子、日本の酒などたいていのものはそろっていた。Pマートの周囲には日本料理店がある。飲用水はミネラルウォーターを購入する人が多い。

2）ローカル市場と屋台

生活に慣れ地理が分かると市場（パサ、パサール）を利用することができる。ストラング・ビュー・コンド付近のテブラオ市場やラーキン・バスターミナルに隣接した市場などで、朝、新鮮な野菜や果物、魚介類などを手頃な値段で買うことができる。場所によっては火曜日の夜に開かれる市場もある。日本での食生活に準じて、市場で購入した野菜や魚を日本風の味付けした食生活をする方が、健康的で経済的である。生活期間の浅いMM2Hビザ滞在者は、中華料理、マレー料理、インド料理の屋台の味をひと通り楽しんだ後、結局は日本で食べていた食生活になることが多い。屋台を利用した食事は、簡易で安上がりであるが、油や糖分の取りすぎになりやすい。

3）日本料理店

JBの日本料理店は、JBセントラル駅に隣接するタイムズ・スクエアー内や日系スーパー・イオン内にある。また、日本人が多く住むコンドの付近にも日本料理店はある。各種の定食、寿司、丼ぶり、麺類など日本風の味を味わうことができる。隣国シンガポールは、狭い範囲にいろいろな店が開業している日本料理店の激戦区といえる。

7　通信・通話・テレビ

1）携帯電話

MM2Hビザ滞在者にとって携帯電話やスマートフォンは必需品である。携帯電話はプリペイド式で、端末はどこでも店頭販売されているので購入しやすい。日本や韓国のようにSIMカードが固定されていないので、どこの会社のSIMカードを購入しても使用できる。

写真８　必需品の携帯電話

例えば、黄色が目印のDiGiのカードを購入し通話料金を前払いする。DiGiの場合、日本の固定電

話への発信は他社より少し安い。メールは電話番号を用いるSMSである。日本語の選択肢はないので、ローマ字か英語でのやりとりになる。日本からSIMフリーにした端末を持参し、相手も対応機種を持っていれば、日本人同士の間で日本語でのやりとりが可能となる。

通話とメールのできるシンプルな携帯電話が1台あれば、家族・業者への連絡、情報収集、緊急対応などに大変便利である。ディスプレイが白黒で安価なものは100RMを切る価格で販売されている。

2）Slingboxによるテレビ視聴

現在、多くの日本人は有料衛星放送アストロと契約し、NHKの番組を視聴している。Slingbox（スリングボックス）という機器は、日本の地元で視ている地デジ・BSのテレビ番組を海外や国内各地で視聴できる機器である。今回、筆者の自宅に機器を設置し、実際にマレーシアで視聴できるかどうかの実験をおこなった。ドコモショップでSIMフリーにしたギャラクシーTab10.1LTEとNECノートパソコンを使って、Wifiと3Gでの接続を試みた。KLIA空港に到着後、Tab用にプリペイド・インターネットSIMカードを購入し、3Gで使えるようにした。

JBやKLの宿泊ホテルでは、Wifi環境の問題でパスワードを入れてもつながらないケースがあった。度々どのパスワードでつながるのか、施設のどこでつながりやすいのか、確認が再三必要であった。3Gでは問題なくつながった。

JBのコンドのユニット内で、ギャラクシーTabとノートパソコンでSlingboxによる日本の地方テレビ番組の視聴ができることを確認した。海外から日本で録画した番組を視たり、録画操作をしたりできる。周囲はマレーシアであるが、日本にいるような感覚で過ごすことができる。スカイプ、メール、ネット検索なども問題なくできる。

KLでは市内と市街に住む知人の協力を得て、ソニーのLocation Free（ロケーションフリー、通称ロケフリ　現在生産中止）とSlingboxの映り具合を比較してみた。Slingboxの方が格段に映りがよい。日本で見ていた地方のテレビが視たい人にはお勧めである。

ノートパソコンまたはハードディスクと、大型テレビ画面を接続すれば、日本の自宅と同じように視聴できる。Slingboxの情報はまだ知られていないのか、多くの人が視聴し

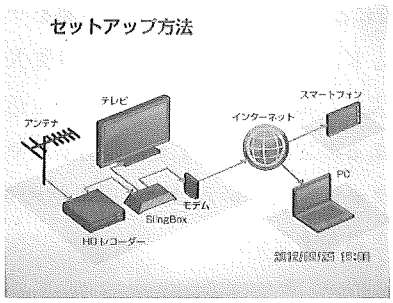

写真9　Slingboxの仕組み

写真10　日本の番組の映り具合

ていない。しかし、中には日本の留守宅または家族の住む家に機器を設置してマレーシアで視聴している人もいた。設置の際に、配線が自分でできる人は器機の購入費のみで済む。Slingboxに対応しているリモコン・録画器の対応機種と設置環境の確認が必要である。ケーブルテレビと契約している場合、接続方法が異なるので販売先イーフロンティアに事前確認をする必要がある。

8　余暇利用とサークル

1）余暇活動と滞在スタイル

JBの日本人会だよりに会員向けの活動が掲載されている。日本人会会員は駐在員及びその家族であり、会員数からしてサークル数も限られる。同だよりによると、テニス、シャドーボックス、麻雀、茶道、和太鼓、図書ボランティアなどの会員活動がみられる。また、JBには日本人会とは別に陶芸教室やバティック、語学教室などや、その他、任意のサークル活動もあり、それらへ参加することもできる。

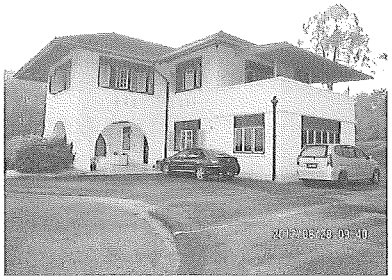

写真11　JB日本人会

会員の中に駐在員の延長でMM2Hビザを取得し、週20時間の労働を許可された70代の会社勤めの人がいて、各種の活動の中心的役割を担い、生き生きとされていた。一般的なMM2Hビザ滞在者は、第2の人生で与えられた自由時間を楽しみたい人が大半である。筆者の知る限り、日本人のMM2Hビザ滞在者で労働を許可された人は他にいない。許可条件は、現地の雇用を確保するために、現地の人ではできない仕事であること、現地経済に貢献する仕事であることであり、そのハードルは高い。

日本人会に加入しないJBの新たなMM2Hビザ滞在者は、一週間の生活スタイルを模索しているのが現状であろう。若い世代で働かなければならないMM2Hビザ滞在者の中には、会社に行かなくてもネット環境があれば仕事ができる人もいて、このような人には余暇サークルの必要性は高くない。ここに新たなMM2Hビザ滞在スタイルがみられる。その実態は研究課題である。

KL日本人会では、MM2Hビザ滞在者も会員になることができ、余暇時間をサークルに参加し充実した日々を過ごしている人がいる。KLの日本人会のサークルは先人の努力もあり、スポーツや文化系のサークル活動の充実した場所である。滞在目的や生活スタイルが明確であれば、気候の一定した暖かい国であるので活動しやすく、生活基盤や生活リズムもつくりやすい。その点、JBは余暇サークルに関していえば、年金生活のMM2Hビザ滞在者にとっては、滞在環境が整っているとは言えない。

2）ゴルフ

余暇利用の一つに、安価でプレイできるゴルフをあげる人が多い。JB観光局の資料には、

ジョホール州には、JBを中心に16のゴルフクラブが地図に掲載されている。JB中心部から近いスターヒル＆ゴルフカントリークラブは日本人会のコンペにも利用されている。会員権をもつMM2Hビザ滞在者によると、会員になるにもビジターとしてプレイするのも日本の感覚からすると負担のかからない金額であった。ゴルフ場の中やゴルフ場に隣接したコンドに住む日本人もいる。キャメロンハイランドやコタキナバルなどには、宿泊環境も整っていて、日本の猛暑や冬の寒さを避けて来馬する渡り鳥タイプのロングステイヤーもいる。JBには、まだそのような状況は発生していない。

3）その他

JBにはショッピングモール、大型スーパー、アウトレットモールがあり、日常的に買い物、グルメ、映画などに時間を費やすこともできる。自家用車で1時間も走れば、海辺のリゾートでマリンスポーツを楽しんだり、のんびりした時間を過ごしたりできる。中長距離バスやマレー鉄道を利用した旅行、LCCエアアジアを利用した国内外の旅行も手頃な価格でできる。特技や資格を活かして国際交流や現地社会に貢献することも可能である。シンガポールの観光インフラを利用すれば、より幅広い楽しみ方も可能である。JBで唯一日本の本が読める場所は、日本人会の図書館である。

9　生活サポート機関及び生活情報

1）MM2Hビザ取得代行業者

一般的にMM2Hビザ取得代行業者[17]は、有料で生活支援をしている。JBには日本人対象のMM2Hビザ代行業者はない。日系G社が代行業者としての許可を申請中である。また、KLやペナンのようにロングステイ財団の公認海外サロンもない。G社は財団の賛助会員の申請もしている。現在、G社の取り扱うユニット販売やHSBC銀行プレミア口座の開設に伴うMM2Hビザ取得は、許可証をもつ業者と提携し申請している状況と判断した。

JBのMM2Hビザ滞在者の大半は滞在期間が長くない。前述のようにビザ取得者の中には、口座を開設しユニットを購入していても、JBに居住しない人も含まれる。これまでの年金生活世代のMM2Hビザ滞在スタイルと異なる場合が見られる。

駐在員が大半をしめるJBは、生活情報は前任の駐在員や会社の引き継ぎ資料として伝わってきている。しかし、会社という後ろ盾のないMM2Hビザ滞在者には、頼りはユニット販売業者や知り合った日本人同士である。自力で生活基盤を整えていかなければならない。

JBでもKLのようなMM2Hビザ滞在者の善意による情報提供グループができていけば、住みやすい条件も整備されていくと考える。現状ではまだそれは見込めない。日本のようにボランティアで動いてくれる人や組織に期待するのは時期尚早である。そこで、必要な時には対価を払いサービスを得る、という柔軟な考え方と自己責任の姿勢を有するこ

とが海外生活にとって重要である。

2）紙面による生活情報

改訂版「JB生活情報誌」が1999年に会員のボランティアにより編集され、JB日本人会から発行されている。改訂には労力を要することもあり、その後の改訂版は発行されていない。参考になる部分もあるが、10年を経過していて状況は変化している。

以下の紙面資料は、KL中心に掲載されているが、マレーシアの他の地域でロングステイをする場合にも参考になる部分は多々ある。

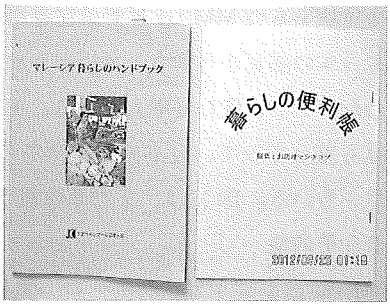

写真12　参考になるマレーシア暮らしのハンドブック

○書籍・冊子・フリーペーパー

『マレーシア暮らしのハンドブック（2011年改訂版）』KL日本人会発行、B版90頁。セカンドホームクラブ及び日本人会の力作。この冊子はセカンドホーマーにも駐在員にも参考になる。

阪本恭彦『ご褒美人生マレーシア（全面改定・増補版）』イカロス出版、2011。著者は2000年から移住し、KLのよさをさまざまな機会を通じて発信している。

石原彰太郎『日本脱出先候補ナンバーワン国マレーシア』筑摩書房、2011。著者は移住20年の経歴で、日本をベースにマレーシアでのロングステイ、資産形成、子弟の国際教育を提案している。

クラウンライン編『ハローマレーシア（マレーシアライフの取扱説明書）』年1回改訂発行、A4サイズ300頁。日本で買えば約4000円と高いが、マレーシアでは2013年版が38RM。KLCCの紀伊国屋書店、KL日本人会で購入できる。

南国新聞編『もしもし電話帳2012/2013』年1回発行、無料。日本人の主な立ち寄り先に置かれている。発行から在庫がなくなる状況である。

○日本語フリーペーパー

日本語フリーペーパーが日本人会をはじめ、主な日本人立ち寄り先に置かれている。「南国新聞」（木曜発行、定期購読可）は、マレーシアのニュース記事を含む総合情報紙的な読み物である。クラウンライングループ発行の「パノーラ」はレスランや各種の情報が掲載されている。KL中心の情報が多いが、参考になることもある。

3）日本語情報PCサイト

日本にいてもマレーシアのどこにいても、ホームページやブログ、SNSなどを有効に使うことにより情報収集しやすい時代になった。治安情報は在マレーシア日本大使館、マレーシアの観光総合情報は日本マレーシア政府観光局、現地ニュースはマレーシアナビ、在留邦人のコミュニティサイトはジャラン・ジャラン…とノートパソコンは情報収集の必需品である。JBには経験したことをブログで発信しているMM2Hビザ滞在者がいる。

ロングステイに関する情報発信をする公益法人ロングステイ財団の公式サイトには、マレーシアの各地の生活情報に精通したアドバイザーも登録されているので、質問をすることもできる。

現地事情に精通した生活経験者からノウハウを聞く意義は大きい。日本やマレーシア各地でさまざまな情報収集の機会はあるが、筆者の知る限り、KLのように、セカンドホーマー有志による水曜説明会や日曜ロイヤル会などの誰にでも開かれた会は、JBを含むマレーシアの他の地域ではみられない。しかし、それぞれの地には、業者、ロングステイ同好会、PC、個人レベルでの情報があるので、紙ベース情報と併用すれば情報収集力如何で、ある程度必要とする情報を集めることができる。

JBにおいて、時間に余裕のあるMM2H滞在者の中から日本人会の「JB生活情報誌」を改訂編集するボランティアグループがでてくれば、在留邦人社会に大きな貢献をすることになるだろう。

10　総合的にみたJBの生活インフラ環境と課題

日本人会があり日本人学校が設置されている都市には、一定数の日系企業の駐在員及びその家族が滞在しており必要な物資は入手できる生活インフラ環境がある。筆者が25年前シンガポール駐在時代に訪れた頃のJBの状況と比べると、経済発展や日系企業の進出に伴い、生活インフラ整備はかなり進んでいる。特別なものを除いては何でも入手でき、総合的な生活インフラは整っているといえる。

海外ロングステイの相談内容の常に上位に挙がってくるのは、治安、ビザ条件、資金、医療、住まい、留守宅の管理、交通手段、サポート機関などである。

治安については海外であることを意識し、セキュリティ面に対する自己努力は常に必要である。ユニットの入口に鍵がかかる鉄格子扉（グリル）は必須条件である。複数の鍵やセンサーキーを所有しなければならない社会である。

MM2Hビザ取得条件のポイントは、50歳以上は50万RM以上の預貯金の証明と月1万RM以上の収入、15万RMのマレーシアの銀行への貯金である。生活スタイルにより支出は異なるものの、日本とマレーシアの両方に足場を置いて長期生活するには経費がかかる。

医療は病院や保険と関係する。JBはいざというときシンガポールの医療機関のインフラを活用できる位置にある。自分の体と相談の上、安全を考えた保険の備えが必要である。住民票を抜いて困るケースもあり、保険についての理解の甘さが一部の人にみられる。医療機関を訪問した際には、病死や事故死の痛ましい事例を聞く。それぞれの保険の内容を理解して、使えるようにしておくことが重要である。

ユニットの契約を自分でできる人は少ない。英文の契約文書の理解、契約事項の諸事項

を経験のない日本人がすることは難しい。オーナーと交渉のできる業者に仲介を求めた方がよい。

日本の家を売却してロングステイに入る人がいる。家族や夫婦の状況は変化するので、生活スタイルを見極めてからでも遅くない。一定の年数を楽しんだ後、帰国する人が大半である。JB で滞在年数が長く人間関係を築いている人は、「MM2H ビザを取得するのは容易だが、ビザをいつ返納するか引き際が難しい。」と話した。KL でも滞在年数が 10 年を超える人の中には、遺言を書いて自身や配偶者の介護や、人生の最後をどのように迎えるかを真摯に考えている人がいる。誰しも避けて通れない第 2 の人生の非常に重要な選択問題である。

マレーシアの MM2H ビザを取得し長期滞在される人の多くは自家用車を所有している。日本のような車検制度はないので、自己責任で年に 2 回程度の点検整備は不可欠と考えたい。ガソリンは 1 ℓ 2RM と安く維持できるが、事故や故障の緊急時に対応ができるような備えが必要である。

地方都市イポーには日本留学経験のある中国系業者がいて、MM2H ビザ滞在者に、会員になることを条件に、いざというときの有料サポートをしている。マレーシアにはジャガム Jagam という日本留学経験者の組織があるが、JB に MM2H ビザ滞在者をサポートする現地事情に精通した業者、人、組織は今のところ見当たらない。現在のところ、投資や資産分散目的の滞在者が主であり、年金生活者のお助けマンクラブのような組織がつくられる可能性は少ない。

しかし、今後、さらなる MM2H ビザ滞在者の増加に伴い、他地域でもみられる生活上のさまざまなニーズが生じると予想する。すべて自力解決で解決できるような人は限られている。状況によっては、ロングステイ財団の公認海外サロンのようなサポート機関の設立が求められる。

11　おわりに

本稿の記述にあたっては、2012 年 8 月に現地調査及びインタビュー調査を実施し、関係機関や MM2H ビザを取得したロングステイヤーの協力を得た。以下の点が明らかになった。

① JB における MM2H ビザ取得者増加の要因

JB の MM2H ビザ取得件数の増加の要因は、幅広い年齢層による投資や資産分散をベースにした動きに起因するものである。MM2H ビザを取得し滞在する人の考え方や生活スタイルには多様性がみられる。MM2H ビザを取得しても、JB に滞在しないケースもある。マレーシア政府観光省は日本人の MM2H ビザ取得を歓迎する一方で動向に注目している。滞在者の実数及び詳細な分析は今後の課題である。

② JB の MM2H ビザ滞在者のための総合的な生活インフラ状況と課題

JBはロングステイに必要な生活インフラは整備されているが、会社という後ろ盾のないMM2Hビザ滞在者が増加傾向にある。今後、MM2H滞在者のためのサポート機関の必要性や、生活の手引きとなるJB版ハンドブックの必要性がでてくるであろう。また、JBでのMM2Hビザ滞在には、活動の場を選択できるほどサークルは充実していない。当面は異文化を新鮮に感じるが、することがないと飽きてしまう可能性がある。現地の人とも交流をもち、自立した生活を送ることができる人はどこでも生活基盤をつくることができる。

これまでロングステイの関心事の中心は、ビザ取得や滞在生活のノウハウであった。しかし、滞在の長期化に伴い生活基盤を築き、滞在者から移住者に変わる70代80代の人々が徐々に増えている。

海外での病死・事故死の問題や人生の最終期に関連する介護や終末期の迎え方の問題には、焦点が当たってこなかった。現在、KLでは日本人のための介護施設の建設計画が進んでいる。運営が軌道にのれば、アジアでのロングステイのモデル事例となるだろう。今後、JBを含む各地での情報収集時に、これらを含めた研究をしていきたい。また、生活を伴う海外ロングステイでは緊急時の備えは最重要課題である。危機管理の観点から相談者や滞在者に還元できる研究に取り組んでいきたい。

注及び引用文献

1）マレーシア政府観光省MM2Hセンター公式サイト http://mm2h.gov.my/

2）MM2Hビザとは、Malaysia My Second Home Program の略、正式にはMultiple-entry Social Visit Pass と言い、10年間出入りが認められた長期滞在ビザのことである。夫婦（介護者含）も単身者も1件と考え、件数よりも人数の方が多くなる。詳細な説明はマレーシア観光省の公式サイト http://www.mm2h.gov.my/japanese/conditions.php を参照。

3）2010年8月26日に在マレーシア日本国大使館にて町田領事からの情報提供。在留届をもとにマレーシアの各地域に滞在するMM2Hビザを取得しているセカンドホーマーの人数を把握した。

4）登録ロングステイアドバイザー制度は、2007年より財団法人ロングステイ財団主催で研修講座を受講し一定水準を認められると登録アドバイザーとして登録される。筆者は2008年に登録ロングステイアドバイザーとなり、相談活動の一翼を担っている。アドバイザーとなる人は、FPの資格を有する人や旅行業界に勤める人のほか、駐在経験やロングステイ経験のある人が多い。2012年に財団の審査を受け、講師として登録されている。

5）インフラ：インフラストラクチャー（infrastructure）の略。国家・社会などの経済的存続に必要な基本施設を意味する。この言葉は既に市民権を得ていると考え使用した。

6）今回のロングステイ調査期間2012. 8. 24～9. 13、前半の調査期間をJB調査に当てた。マレーシア調査は2009年に開始して4回目の調査になる。

7）財団法人ロングステイ財団編『ロングステイ調査統計2011』（財）ロングステイ財団、2011。

8）JM My Second Home Consultancy Sdn.Bhd. 東京営業所、株式会社ゼン・インターナショナル。

9）マカオに拠点を置くGLOBAL ASIA INVESTMENT GROUPに所属する総合コンサルタント会社GLOBAL ASIA ASSETS (M) SDN. BHD. 代表者、藤村正憲氏はジョホールバルに「リトル・ジャパン」構想をもつ。同氏に2012年8月29日にインタビュー。購入状況や移住状況については南国新聞編『も

しもし電話帳 2012/2013』（P193）に取材内容が記載されている。

10）日本の HSBC プレミア口座開設は諸事情により中止された。マレーシアでは 20 万 RM（約 500 万円）と他国の半額で口座取得可能である。融資率やプレミア間の送金無料、金利などのメリット、MM2H ビザの定期貯金の利用をした不動産投資、医療費支払いも可能である。

11）小規模な国際校 Seri Ara Schools には十数名の日本人児童・生徒が在籍。英国のマルボロカレッジがジョホールバルに 2012 年 9 月に開校。試験により邦人数名が入学予定である。

12）イスカンダル計画は Key Driver of ISKANDAR MALAYSIA「The World in One City Progress Report Jan 2012」UEM LAND. に記載。

13）リトル・ジャパン構想については、GLOBAL ASIA INVESTMENT GROUP の資料「JOHOR BAHRU」、南国新聞編『もしもし電話帳 2012/2013』（P193）に掲載されている。

14）「シルバー・コロンビア計画　－海外居住希望者のための支援事業について－」通商産業省、1987。

15）KL に 12 年のセカンドホーマー歴をもつ阪本恭彦・洋子夫妻の調査資料（2012.7.23）によると、典型的な生活費を住居費を含めて月 5000RM と算定している。ユニット賃貸料には幅があり、為替レートが日本円の総額に影響する。円高の 2012 年 8 月の時点では、1RM ≒ 25 円で 5000RM ≒ 125000 円、円安になり 1RM ≒ 30 円となると 150000 円となる。

16）Koji Rokkaku 編『ハローシンガポール 2007 』C.E.M ASIA SDN.BHD、2006 。年 1 回改訂版が発行、2013 年版が最新情報である。

17）マレーシアでの日本人を対象にした業者は、JM コンサルタンシー、トロピカル・リゾート・ライフスタイル社、オーバーシーズリビング、ネット・ワーク・ホリデーズなどである。

参考文献

「シルバー・コロンビア計画　－海外居住希望者のための支援事業について－」通商産業省、1987。

通商産業省産業政策局編『海外滞在型余暇　－国境を越える余暇の将来展望－』財団法人通商産業調査会、1988。

杉山光右編『ジョホール・バル生活情報誌』ジョホール日本人会、1999。

The Expat MM2H MALAYSIA MY SECOND HOME GUIDE 2010（国外の居住者のための長期滞在ビザガイド 2010 年版）

Johor Tourism Department. JOHOR MALAYISA GOLFERS' PARADISE. Publishing & Communications Sdn.Bhd.

財団法人ロングステイ財団編『ロングステイ調査統計 2011』（財）ロングステイ財団、2011。

セカンドホームクラブ /KL 日本人会編『マレーシア暮らしのハンドブック』クアラルンプール日本人会、2011。

南国新聞編『もしもし電話帳 2012/013』南国新聞、2012。

阪本恭彦『ご褒美人生マレーシア（全面改訂・増補版）』イカロス出版、2011。

Shikauchi 他 2 名編『ハローマレーシア 2011』CEM Asia Sdn. Bhd、2011。

田渕聖子ほか編『ハローマレーシア 2012』C.E.M ASIA SDN. BHD、2012。

田渕聖子ほか編『ハローマレーシア 2013』C.E.M ASIA SDN. BHD、2013。

http://www.longstay.or.jp/　財団法人ロングステイ財団公式サイト。

http://www.tourismmalaysia.or.jp/　日本のマレーシア政府観光局公式サイト。

Main Reasons for the Increase in the Number of MM2H Visa Acquisitions by Japanese Citizens and the Current Living Situation for Visa Holders who Reside in Johor Bahru, Malaysia

Akio KURODA
College of Science and Industrial Technology
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October 1, 2012)

This paper is based on my fieldwork done in August 2012.

The purpose of this paper is to better grasp the main reasons behind the increase in the number of Japanese citizens with MM2H visa currently living in Johor Bahru, Malaysia. This paper will explore the living situations and general infrastructural problems for MM2H visa stayers. Ideally, my research will help prepare future MM2H visa stayers for living conditions in Johor Bahru.

The increase in the number of MM2H visa holders in Johor Bahru is caused mainly by property investment by a wide range of age groups. Even though some Japanese citizens have acquired an MM2H visa, they do not stay in Johor Bahru. The Ministry of Tourism in Malaysia welcomes MM2H visa acquisitions from foreign citizens, but watches the influx of people and investments cautiously. The actual number of MM2H visa holders from Japan who continue to reside in Johor Bahru is currently unknown and I plan to research this more in the future.

General infrastructure in Johor Bahru which is necessary to stay long term is mostly available for Japanese residence. However, there is a lack of support and assistance, and thus there is an urgent need for a support organization. As well, handbooks which assist new residence living in Johor Bahru urgently need to be revised with up to date information useful for everyday living.